講評

第 17 回公共建築賞 東北地区審査委員会 委員長

東北大学大学院工学研究科教授
石田　壽一

公共建築賞・優秀賞
行政施設部門（東北地区）

住田町役場

住田町役場は、築50年を経過したRC庁舎を木造で建て替えた施設である。

企画の面では、町面積の90%を占める森林資源を活用し、他地域に先駆けて建設された木造庁舎である。東日本大震災後の建材・労務供給が逼迫する中実現するために、地域産木材を活用した木造・木質化を前提としたデザインビルド方式で実現された。架構は、全体を単純な矩形とし門型の木構造を反復して構成している。建物配置は、後に建つ消防署とともに、町の広場のような駐車場を囲む配置であり、この後の「木質の中心市街地」のパイロットプロジェクトとして、大きな存在感を示している。

設計の面では、地上2階建の純木造建築物であり、主要部は集成材で構成し、燃えしろ設計により構造材を被覆せず内外で現しにしている。大空間を実現するレンズ型木造トラスは、短材をドリフトピンで接合し、現しで金物が目立たず、木質感が感じられる高度な構造・意匠を兼ね備えたダイナミックな架構である。さらに、地域産業の林業と連携し、内外装に地元の木材を使用し「森林・林業日本一のまちづくり」をアピールする木質庁舎としている。

施工の面では、震災後の多くのハードルにもかかわらず、設計時から発注者・設計者・施工者が一体となって技術開発・材料発注を行うことで、1年間の短工期を実現し、美しく施工されている。

地域社会への貢献については、地元の主要産業材料を使った町の中心として、好感が持てる。施設管理は、外部の木外壁等の経年劣化が気になるところではあるが、メンテナンスは計画的に進められている。また、自然エネルギー利用を積極的に行っている。

公共建築賞・優秀賞
文化施設部門（東北地区）

はじまりの美術館

この美術館は、江戸時代後期の酒蔵などに使われていた歴史的建造物を知的障がい者が制作するアートを展示する美術館にリノベーションした作品。

企画については、全国に展開されている知的障がい者のアートを展示する美術館の3例目の施設として企画されている。古い建造物をリノベーションした展示施設としてはここが初めてである。

設計については、歴史的建造物を展示施設として保存

再生リノベーションする設計は、かなり難度の高いものと考えられる。古い建築を生かしながら、展示施設としての機能を満たすには、空調や湿度管理の面でやや劣っているとみられるが、それ以上に太い木柱や木梁が現れている魅力ある空間がつくられている。構造体としても機能させているコンクリートブロック造の間仕切り壁は好みの分かれるところであろうが、設計者の意図はよく伝わっている。

施工については、古建築再生の高い技術を習得した工務店が施工し、さらに、北国では必須の断熱工法等も熟知しており、優れた再生建築を実現させている。

地域社会への貢献については、この美術館は芸術・文化をこのまちに寄与し、地元の人のみならず、遠方からも人を集客し、さらに、地域のコミュニティーの拠点として機能し、まちづくりに寄与していると感じた。

施設管理は、小さな施設であることからも一般的な美術館のようなキチキチした雰囲気はなかったが、厳しい冬の間は、積雪が多いことから、雪の管理が大変であると感じた。再生可能エネルギーの導入、耐久性等は、再生エネルギー等は利用されていないし、導入の予定もない。ただ、屋根の材料に高耐久耐候性のチタン材が用いられている。保全に関しては、設計者が年に1回ないし2回訪れ、点検等を行っている。

公共建築賞・優秀賞
行政施設部門（東北地区）

福島県国見町庁舎

国見町庁舎は、先の震災で大破した庁舎を建て替えた施設である。

企画については、庁舎の建て替え計画を進めるに当たって、検討委員会を設置し使い方や機能を十分に揉み、先進的な庁舎の基本計画を策定し、設計プロポーザルを行い設計者を選出している。

設計については、鉄骨造に耐火被覆として木材で覆う、木質ハイブリッド構造を用いて設計していることで、一見誰もが木造でできていると錯覚するほどフレーミングは素晴らしく、プレハブ的なこの工法であることで、職人不足の復興期間中でも、工期内に建築をつくり上げることができた。さらに、地域産業の林業と連携し地元の木材を可能な限り使用し地産地消をアピールする木質庁舎としている。また、福島の原発事故を教訓とし環境に配慮した庁舎を目指し、ペレットボイラー等による冷暖房、太陽光発電、雨水利用など設計に取り組んでいる。

施工については、あまり普及されていない木質ハイブリッド構造を実現するためには、多くのハードルがあったにもかかわらず、その工法を理解し美しく施工されている。

地域社会への貢献については、議会室が多目的ホールに、一階ホールはイベントホールに利活用され、コミュニケーションを広げる場として機能する計画は好感が持てた。

施設管理は、外部の木ルーバーや木板等の経年劣化が気になるところではあるが、メンテナンスや清掃等は計画的に進められているようであった。

再生可能エネルギーの導入および省エネルギー性等保全については、複層ガラスとルーバー、ペレットボイラー、太陽光発電、自然光利用、雨水利用、など、再生可能エネルギー利用と自然エネルギー利用を積極的に行っている。

地域特別賞
東北地区

南陽市文化会館

「南陽市文化会館」は、老朽化・バリアフリー・耐震化などの問題を抱えていた旧市民会館に関して、市民から市議会への請願などもあってその建て替え事業として企画された。一方で、市の面積の大半を占める森林の維持という課題への対応から、これを木造での建て替えとし、林業や建築業など地域の産業の活性化や雇用創出などを目指すこととしたものである。

地元企業が開発した、石膏ボードで木材を覆うタイプの耐火木造技術による大径の柱が支える大空間は、古代ギリシャの神殿のようでもある。28mスパンの大ホールを支える5本組柱と集成材立体トラス梁、それらを実物大モックアップで品質を確保しつつタイトな工程に納め、同時に耐火木材の大臣認定を申請・取得するなど、建築技術的な挑戦が感じられる。

内装が全て木材の音楽ホールは珍しいが、その音質を愛する著名な音楽家が何度も公演を催しているほか、独自企画の催しや、市民自身の企画による催しにも利用されている。さらに、公演に訪れる客が赤湯温泉を利用しているほか、ここを拠点とする米国の音楽グループが市内の学校で吹奏楽指導するといった影響も及ぼしている。

木材を活用するという本企画の強い意志を感じさせる内部空間に比べて、外観意匠が物足りないこと、前面道路や隣接する市役所との関係性についてもうひと工夫ほしかった点など、建築作品としての総合性の観点からは上位3作品とは差がついた。それでも、市民の要請を受けて地域に建ち、地域の課題に応え、その活性化の一翼を担い、高度な建築技術により実現した本建物が優れた公共建築であることは間違いない。

地域特別賞
東北地区

仙台市地下鉄東西線
国際センター駅・青葉の風テラス

「仙台市地下鉄東西線　国際センター駅・青葉の風テラス」は、2015年12月に仙台市に新たに開業した市営地下鉄の駅舎として計画された。市中心部から西に延びて広瀬川を越えてすぐの同駅は、美術館や東北大学などが建つ緑豊かな文教地区に位置しながら、既存の国際コンベンション機能への輸送機能を担う。

この立地を踏まえ、利用者への情報発信、周辺施設との連携などをテーマに据え、「青葉の葉テラス」を設け

る計画とした。

動線の拠点として通り抜けの軸を設けるとともに、ガラスの外装により視覚的にも透過性を持たせ、同時に鉄道機能あるいは国際コンベンション機能に対峙する先進性を象徴している。空間構成の鍵はホームの階段上部に設けた改札階と2階をつなぐ吹き抜けである。単に改札を抜けて目的地へ急ぐだけの空間ではないことが誰にも感じられ、自ずと2階の様子に注意が向く。

2階では何らかのイベントが催されていることが多い。1階にもイベントを受け入れる空間的余裕を持たせているが、2階には飲食施設が常設されている他、屋内側・屋外側にさまざまなイベントが可能なスペースを設けており、全て民間事業者に運営と管理を委託している。屋外テラスは木質デッキと芝張りで、通路を経て外部の遊歩道に連絡する。

吹き抜けとガラス張りは、温熱環境的には弱点となるが、これには床面での輻射熱による空調などで対応した。それでも窓面へのフィルム貼りや吹き抜け周囲への手すり壁設置といった追加措置が必要となるなど、課題が残った。

それでも、この位置に駅を設けるという企画の時点で持って生まれたポテンシャルを、存分に引き出した優れた公共建築といえよう。

（受賞作品掲載は地区推薦順）